

〔資料紹介・翻刻〕

（山口県文書館蔵） 毛利広鎮『類題玉函集 下』

小野美典

前稿〔注1〕に引き続き、徳山藩八代藩主毛利広鎮の家集『類題玉函集』（山口県文書館所蔵）を翻刻する。本作品は、上下二冊の版本で全三百首の歌を収載している。本稿では下冊の翻刻をおこない、これにて了とする。

本資料の書誌・解題等は前稿を参照されたい。凡例は、煩を厭わず再掲載した。また、『類題玉函集』の成立に関して〔注2〕、並びに本書の成立に深く関与したと思われる近藤芳樹の類題集編集に関して〔注3〕は、それぞれ別稿を参照していただければ幸いである。

前稿を一カ所訂正したい。七六番歌「す、しさになにはおもはずなには江のあしのは戦く水の夕かせ」に注を付して「四句『あしのは戦く』はママ」としたが、この「ママ」とする注記全体を削除する。稿者は当初「葦の葉たたく」と読んで、歌意ならびに当て字を不審に思い、「ママ」の断りをした。しかし、ここは「戦く」をそのまま「そよぐ」と読んで、「葦の葉そよぐ」で歌意が通じ、「ママ」は必要としない。「戦く（そよぐ）」の訓に思い至らず、「ママ」と誤った断り書きをしました。拙稿をお読み下さったさるお方から、芳書にて懇切丁寧なご指摘をいただいた。お名前は伏せるが、ここに記してお礼申し上げます。

また、昨年（平成21年）秋に長門市立（旧三隅町立）村田清風記念館に伺った際、当館に『類題玉函集』の版本（上下2冊）が存在することが判明し、現物を確認することができた。本稿で底本とした山口県文書館所蔵のものと同じの版本である。従来存在を広くは知られなかったものであり〔注4〕、ここにその旨を記載しておく。

〔注〕

1 拙稿「〔資料紹介・翻刻〕（山口県文書館蔵）毛利広鎮『類題玉函集 上』」（『山口国文 三三』号）山口大学人文学部国語文学会編集発行、平成21年3月。

2 拙稿「毛利広鎮の『類題玉函集』について―成立年次を中心に―」（『語文 一三三輯』日本大学国文学会編集発行、平成21年3月）。

3 拙稿「近藤芳樹の編集した類題和歌集について―『類題阿武の杣板』『類題風月集』『類題和歌月波集』―」（『語文 一三五輯』日本大学国文学会編集発行、平成21年12月発行）。

4 『村田清風記念館古書目録』（三隅町立村田清風記念館編集発行、平成13年3月）には記載がある。

〔付記〕

本稿を成すにあたって、資料閲覧の便宜をはかつてくださり、資料翻刻をご承諾くださった「山口県文書館」に、衷心よりお礼申し上げます。また、「長門市立村田清風記念館」にもあわせてお礼申し上げます。

凡例

一、底本を出来る限り忠実に翻刻するようにつとめ、改行も底本通りとした。

一、仮名は、現行の字体に統一した。

一、漢字は、常用漢字表に掲載されるものはその字体を用い、表外漢字は旧字体とした。

一、繰り返し記号（踊り字）は、仮名の一字は「ゝ」、仮名の二字以上は「く」、漢字は「々」で統一した。

一、頁移りを「で区切り、丁数を算用数字、「表・裏」を「オ・ウ」で示した。

一、誤植の想定される歌、やや不審な歌に関しては、注を付して末尾に言及した。

一、各歌の上に、漢数字で歌番号を付した（上冊からの通し番号）。

類題玉函集下

冬

山家初冬

（二六五）人間はぬわか山まをふゆきぬとおとろかしてもうつしくれかな

初冬車

（二六六）ふゆきぬとおとろかしけりやくすみをみやこにはこふをくるまのおと

初冬時雨

（二六七）けさははや秋のかたみとみるかうちにもみちさそひてしくれふるなり

千月更衣

（二六八）きくのかのうつりし袖を冬たちてくちはの色にかふらくもをし

残菊映水

（二六九）かみな月うつろふ菊のした水は秋のなこりのよとむなりけり

故郷時雨

（二七〇）浮き雲を志賀の山かせさそひきてけふもしくれのふるさとの空

山時雨

（二七一）けふもまた雲をさそへるかせさえていたく時雨のふるの山もと

棧路時雨

（二七二）ゆく月はしはし雲まにとたえして時雨そわたる木曾のかけはし

浦時雨

（二七三）みるかうちに時雨をさそふ風はやのみほのうらまつ雲かくれゆく

冬夕風

（二七四）夕されはきた山おろし吹さえてさそへる雲や雪となるらむ

山落葉

（二七五）あらし山さくらのこのはちるをみて花にわかれしなこりをそおもふ

竹霜

（二七六）たけのはにしもさやくよのむら雀ねくからもさそな寒けかるらん

（二七七）けさみれはしもおきそひてたけのはのよにかはる色の寒けさ

鶴払霜

（二七八）あしたつの声も寒けしさよふかきつはさの霜やはらひ兼らん

氷初結

(二七九) みきはよりむすひゆけともみからはこほりやかねひろさはの池

池水半氷

(二八〇) けさはまたこほり氷らぬ池みつのこ、ろふたつにみえわたるかな

井水

(二八一) やまのゐのあさきはとこそしられけれこほりはてたる水のこ、ろに

滝水

(二八二) おちたきつ音もとたえてしらいとを結ふ氷のとくる目ぞなき

(二八三) いは、しる水も氷りて春とほしいつこゑきかむうくひすのたまき

湊水

(二八四) みなとえやとまりの舟のいかりなはけさは水そむすひはてたる

社頭冬月

(二八五) おもしろくかくらのをかにうたふなりさかきはてらす月のしも夜に

水郷冬月

(二八六) なには江やあしの末はも霜かれていと、おしる月の寒けさ

夢後冬月

(二八七) ゆめさめてみればまくらのやまのはによひよりさえし月ぞかたふく

松窓冬月

(二八八) 霜むすふまつの葉こしの月かけはまるとにみるたに寒けかりけり

遠近千鳥

(二八九) うらつたひなきわたるらしさよちとりおくれさきたつ声の聞ゆる

初雪

(二九〇) はつ雪のあしたにみればわか庭もつくりかへたるこ、ちこそすれ

雪窓見月

(二九一) しら雪のふりつむまとのいくみ竹よのちりもなくさやけかりけり」3ウ

山家雪

(二九二) たくれのともなしからす声のみをきくもさひしき雪のやま窓

里雪

(二九三) ふる雪にけふさへみちは埋れぬあすかのさとをいかて問はまし

竹雪有声

(二九四) したをれの竹のおとたかく聞ゆなりよふかき雪のほともしられて

雪中客来

(二九五) まれ人をまち得てけりなかつたらはむこともつもれる雪の山まと

深山雪

(二九六) ふりつみしみやまの雪の中にもしたれかすむらんけふり立みゆ

神楽

(二九七) かしこしな霜よの月の影ふけてくもゐにさゆるあざくらのこゑ

衾

(二九八) ふゆのよのふけゆくま、にかさねてもひとりふすまはさやけかりけり

冬日

(二九九) かせさむみふつ、のつら、とけぬまにはやくれわたるふゆの日のかけ

江冬景

(三〇〇) みし色もなきさのはちすかれふして雪のふるえにたてるしら鷺」4ウ

冬獸

(三〇一) あら熊やみやまの雪のふるうつほいてかてにいくか経ぬらん

寒梅

(三〇二) ふゆこもりおもひもあへぬいろみえて山まとふかくにほふうめか香

寒松

(三〇三) こからしに吹のこさる、庭のまつひとりふゆをもしらすかほなる

一鳥過寒水

(三〇四) 夕まくれこほる入えにあざりかねつつかはぬをしのいつちゆくらん

歳暮流水早

〔5オ

(二〇五)かはみつはこほりてしはしよとめともよとむせもなきとしのなみかな

家々歳暮

(二〇六)やとことにかはらぬものはあら玉のとしのくれゆくいそぎなりけり

歳暮松

(二〇七)としくれて雪のしたなるまつのはにみとりそふへき春はみえけり〔5ウ

恋

初聞恋

(二〇八)うき事をきくのした露おちそむる袖のはてこそふちとなららめ

約雨晴

(二〇九)はれもせはこむとちされることはにもなみたの雨そまつをやみける

三年不見書

(二一〇)たまつさのたよりになし秋をへてなくかりかねは三たひ来れとも

恋妨官仕

(二一一)あちきなく恋のやまにそまよひける君に仕ふるみちもわずれて〔6オ

恋不知程

(二一二)さैयाすき露のいのちをたのみにてかきりもしらぬ恋をするかな

流涙顕恋

(二一三)つ、めともたもとのほかにこほれつ、なみたにこひはあらはれにけり

恋綱

(二一四)あさゆふにこころひけともうきふねのつなで絶てはよるかたそなき

袖のなみむねのけふり

(二一五)袖のなみむねのけふりはなへてよの人こそしらねた、ぬまもなし

薄暮恋

(二一六)みかつきのほのかにかけをみてしよりおもひはなれぬ夕くれの空

〔6ウ

夢中契恋

(二一七)すかたこそゆめにもあらめちきりつることはかりたにうつ、ともかな

夢中逢恋

(二一八)まどろみしほどのゆめとはおもへともあひみしこそうれしかりける

遠恋

(二一九)とふかりのたよりもいさやしら雲のよそなる人をこひわたりつ、

近恋

(二二〇)まちかさにいつもあひみてあし垣のへたてもおかぬなかそうれしき〔7オ

春恋

(二二一)わすれめやかすめる空をゆく月のおほろにみえし君かおもかけ

暁待恋

(二二二)まつ人のこゝろしりてやあくるまで聞のともし火きえ残るらん

里三人

(二二三)いつれにかよすかきためんわか心月雪はなとおもふなかに

初夜逢恋

(二二四)三か月のかけはかりなるあふせにもまゆねかきつるほどはしりにき

恋のひま

(二二五)あふほとしはしかわきしわか袖のなみたも恋のひまやしるらん

わたらぬ中

(二二六)いまははやわたらぬ中となりはて、あふくま川の各もうひそなき

わかおもひくさ

(二二七)こひわふるわかおもひくさくちぬともまたもほたるともえやいてなん

奇筆恋

(二二八)たまつさは筆にまかせてかきやれとこゝろのほとはえこそつくさね

奇鏡恋

(二二九)ひやせてむかふか、みもおもなしや人のこ、ろのうつろひしより「8オ

寄髪恋

(二三〇)かたすくるふりわけかみをみてしよりおもひみたれてこひぬ日そなき

寄萱恋

(三三一)秋ふかきのへのをかやのすゑつひにかれゆくなかなとなるそわひしき

寄蓴恋

(三三二)あやしやとしをふるえのねぬなほのくちもはてなてなほなきつ、

寄淵恋

(三三三)つれなしときくのした露それならてなみたそこのふちとなりぬる

寄浦恋

(三三四)人しれぬなみたか、りてから衣ほさぬそてしのうらとこそきけ

(三三五)すみのえやまつよつものうらみてもわすらる、身はかひなかりけり

寄路恋

(三三六)たまほこのゆくてに人をみてしよりこ、ろちまたにふみまよひつ、

寄車恋

(三三七)まつ人のいて、くるまのふくるにもうしのあゆみのおそさをそおもふ

寄水鳥恋

(三三八)こほりあるいり江にすたく水鳥のうきねわひしきこひもするかな「9オ

雑

日

(三三九)四方のくまあらせすてらす天つ日をあふかぬ国はあらしとそおもふ

智

(三四〇)こ、ろの海そこひなきこそかしこけれよしの、山もおくはありてふ

社頭水

(三四一)むかしより清きなかれのいは清水たえぬみいつそくみてしらる、

遠石八幡宮へまうて、

(二四二)たまちはふ神のてらせるか、みやまいくちよかけてあふきまつらん「9ウ

膳臣

(二四三)あたらこにあたせし虎を雪のよにもろはきにしてかへるを、しき

貫之

(二四四)とさのうみやしら浪さわくそこにしもことはのたまをひろひつる哉

児鳥備後三郎

(二四五)さくら木にかきしるしたるもしにこそこ、ろの花もあらはれにけれ

韓信

(二四六)しのひつ、あしまく、りし河水もなかれのすゑはうみとなりぬる

伯牙

(二四七)いまはやく人なしと一すちにおもひたちけんつまこといといと

忠臣待旦

(二四八)とくおきてこ、ろのちりの朝清め君につかへんみちのいそきに

赤心報国

(二四九)たらちねにうけしこの身をしけれと君かためにはすてさらめやは

剣

(二五〇)いくちとせぬきもはなたてつるきたちさやにをさまる御代のかしこさ

弓

(二五一)もの、ふのとるやまゆみは神代よりひきもゆるへぬたからなりけり「10ウ

机

(二五二)ふつくゑのおもはむことそはつかしきちりつもるまでおこたりし身は

菌

(二五三)いつとなくひとはふたはとおちてゆく老木のすゑそあはれなりける

耳

(二五四)おもふことなしもはてぬにけふもまたいりあひのかねのおとそきこゆる

酒を過す人

(二五五)つゆはかりくむはくすりとさくくの酒酔しれるまですくさすもかな

黒

(二五六)しつのをかうし引かへる夕くれにねくらもとめてからすなくなり

少

(二五七)さまく〜とこととはつくせと人こ、ろまことのあるはずくなくかりけり

軽重

(二五八)うめのはなかるくちりしも実となればおつる音こそ重く聞ゆれ

遠近

(二五九)雲かくるとほ山まつはかきくれぬ軒はの竹のあめははれつ、

機織女

(二六〇)いとまなくはたおるいもそなつかしさをなくるまも心ゆるさて「11ウ

遊女

(二六一)とにかくに人になれそふあさつまのふねのうかへる世をたのみつ、

訪山家

(二六二)た、けとも聞えさるらししはの戸はまつ吹かせの音にまきれて

山家水

(二六三)山まどに清きなかれのおときけはみ、をもあらふこ、ちこそすれ

山家夕

(二六四)山かけを折にふれてはたち出て雲をともなふゆふくれのみち

山家鳥

(二六五)うき雲の軒はやまにかゝる日はあめよふ鳩もこゑしきりなり

山家松

(二六六)やまさとにわか老らくのともとみる軒はのまつもとしをへにけり

磯松

(二六七)あらいそのまつふりにけりいくとしのなみのあらへるこつ枝なるらん

山家猿

(二六八)みたひまでなくをきくこそあはれなれよふかき軒のやまさるのこま

憂喜同夢

(二六九)うしとみえうれしとみるもおのつからさめてはおなしゆめのよそかし「12ウ

伐木丁々山更幽

(二七〇)山ふかみ斧のひ、きをたえ〜にきくよりほかのたつきたになし

竹経通幽処

(二七一)世をすてし誰すみ処にかかよふらんやまかけふかき竹のした道

消戸雲鎮

(二七二)たにふかきやまのいほのゆふくれは雲のとさすにまかせてそすむ

海上眺望

(二七三)かきりなき空もはてこそみえわたれいり日のしつむ沖つしらなみ

晴後遠水

(二七四)水かさそおとはるかにもきこゆなりあめ晴わたるまきの柚川

富士山

(二七五)とふとりもかよはぬそらに天ぞ、りひとり秀たるふしのしはやま

墨田川

(二七六)すみた川なのみなかれていまはそのむかし問ふへき鳥たにもゐす

布引滝

(二七七)日に月にさらして清きしらいとをたかおかけし布ひきのたき

関鷗

(二七八)たひ人も鳥かねまたてこえぬめり戸さ、ぬ関のあかつきのそら

須磨夜泊

「13ウ

(二七九)すまのうらやなみのうきねにきこゆなり松かせのこゑむら雨の音

寄鏡述懐

(二八〇)みるたびにおいのなけきのますか、みいと、すかたのはかりゆくかな

鳥鶴

(二八一)もろともにちよ、ひかはし君か代をいはひの鳥にあそふともつる

浦鶴

(二八二)あしたつこのゑもさやけし秋かせのふけひの浦の月に鳴夜は

蘆間鶴

(二八三)なにはかたなにはおもはてあしたつこの、ろゆたかに遊ぶけふかな

台道なる延齡松を

(二八四)いくちよかさかえゆかましやとの松よはひのふてふ名にもたかはて

新殿の元服し給へるを

(二八五)かそいろのいはひそめたるいろなからつるはみ衣ちよもかさねよ

わか八十の賀の時人々鶴の歌をおこせたるに

(二八六)八十をは過て八ちよもなほへよとわれにはひをゆつるなるらし

あるとしの秋長門少将の都より帰国し給ひけるを

(二八七)すへらきの御代のなかとち秋の日にかへりて萩の錦きならむ 〔14ウ〕

八十八の賀の時蓬萊の島台をみて

(二八八)いさやわれけふより千代もすみなれんよもきか鳥をこ、にうつして

人の年賀に寄椿祝といふことを

(二八九)うへしこそやちよへぬらめたまはき葉さへ常磐の色をしめたる

寄月祝

(二九〇)月やしる神のかためし秋つ洲にてりそふかけのかきりなき世は

寄道祝

(二九一)いにしへのた、しきあとをわれはた、ふみてかよはんしきしまの道〔15オ〕

誹諧ふり

燕子花

(二九二)うへもそのつはめに似たる花ゆゑに名をはもしにもかきつはた哉

団扇

(二九三)秋かせのふかぬうちほとたのみつ、手ならず聞そす、しかりける

浪速のあしをもてつくれる笛を

(二九四)なにはえのあしもてつくる笛とてやしらへ高つのみやひたるらん

美人出浴

(二九五)まゆすみはあらひすて、もそのま、のきのふのおもわうちかをりつ、〔注A〕

夷人来朝

(二九六)もしのことよはしりしてかきゑみし豊あしはらをあふき来にけり

車

(二九七)ゆきかへりおもにくるまををちごちにひくをやうしとおもふなるらん

熊

(二九八)月のわをか、せるくまはおく山の洞にいくよの秋か経ぬらん

兎

(二九九)ひさかたの月のかつらにすみなれてよをうさきともおもはざるらし

年のよ床のたからふねを

(三〇〇)たからふねとしのよこにしまたへの枕のゆめよ千とせつまなん 〔16ウ〕

さきの兵庫頭大江朝臣の君。わかくおは

しまし、ほどより。よみ歌好ませ給ひて。八

十をこえさせたまふまで。月花の情を

空しく過させ給ひし事。一日もあらさ

空しく過させ給ひし事。一日もあらさ

空しく過させ給ひし事。一日もあらさ

りしかは。言の葉のかす。かきりもなくおほく  
つもれるを。その中より。おもと人たちのぬき  
出で。集めおきたりしひと、ちあり。そを此  
たひ。かくこなたにて。梓にちりはめしめ  
たまへり。さるはひとめくりのおほむいと  
なみのをり。みたまのみまへにたむけ給ひ  
て後。ゆかりあるおほむかた／＼に。あちちにおく  
らせたまはんと。

17オ

若殿のかしくおもほしたち給へるもの  
から。うつし巻にては。かなの誤。てにをはの違  
ひなども。おのつからありぬへし。とおのれに仰  
せて。た、さしめ。かくはものせさせ給へる  
になむ〔注B〕いてややむことなきわたりには。たくひま  
れなる齢をたもたせ給ひて。よみおかせたまへ  
る言の葉も。高き調へを。黒髪やまの松の  
風にかよはし。深きこゝろを。とのみの海  
のなみの花とさかせ給ひけむは。いとめつら  
しきおほむ事ならずやは。

17ウ

拾へともなほ  
のこりこそおほからめ  
かすもしられぬ  
玉のくしけ  
は

18オ

藤原直寸謹識

18ウ

〔注〕

A 二九五番歌。四句「きのふのおもわ」の「わ」はママ。

B 「なむ」の直下に「」があるべきだが底本にはナシ。

(おの・よしのり)